

日本初の アスファルト舗装に 挑んだ由利公正

由 利公正は、東京府知事を退いた後、様々な殖産興業に取り組みました。その一つがアスファルト（土瀝青）事業です。

由利は、明治5（1872）年5月から翌6（1873）年2月まで、岩倉海外使節団に同行し、欧米の政治や文化、産業に直に触れる機会を持ちました。帰国後、その見聞をもとに、福井での絹織物改良や東京都板橋区での乳牛飼育、群馬県での中小坂鉄山開発など殖産興業に積極的に関わり組んでいます。それら事業の一つに、アスファルト事業があります。

明治10（1877）年頃、秋田県勧業課長から秋田産のアスファルト

の利用方法について相談を受けた際には、「パリにおいて実見した天然アスファルトであり、各国でも重要視しているもの。この土塊は良品なり。大いに利用に励むべし」と述べたといえます。欧米視察の際に、すでにアスファルト事業に着目していたことがうかがわれます。

その後、明治10（1877）年8月、東京上野で開催された「第一回万国勧業博覧会」の会場（園芸館）で、日本で初めての「アスファルト舗装に挑戦します。しかし、突貫工事と作業員の不慣れが原因で火災を起し、中断を余儀なくされました。しかし、由利はあきらめません。翌年の明治11（1878）年、東京の神田川にかかる鉄製の昌平橋（旧

昌平橋。現在の昌平橋とは異なる）でアスファルト舗装工事に再挑戦し、ついに日本で初めて成功します。昌平橋は、由利自らが指揮を取って架橋し、舗装に使用したアスファルトは秋田県豊川村のもの200俵といわれています。天然アスファルトの活用を相談した秋田県民の思いを汲み、ここでも由利のかねてからの主張「民富めば国富む」を実践したのです。

日本初のアスファルト舗装がどこかについては、長崎市「グラバー園」内の道路と昌平橋との間で論争が繰り返されてきました。しかし、舗装専門家向けの書籍『新編』語り継ぐ舗装技術』（鹿島出版会）は、「同園の舗装道路はアスファルトではなく、コールタールを用いて」おり、日本初は昌平橋であると指摘しています。こうして、由利の名は昌平橋とともに歴史に記録されているのです。



由利公正肖像（岩倉使節団に同行した頃）
（三岡丈夫『由利公正伝』より）

自分の信念や信条をあくまで貫き、幕末明治期に多くの功績を残した由利。庶民のためにという思い、そして、先進的なものに挑戦し続ける姿勢は、殖産興業の足跡でもうかがい知ることができます。

関連史料・ゆかりの地

旧昌平橋



現在の万世橋（かつて旧昌平橋があった場所）

日本初のアスファルト舗装がなされた鉄橋として知られる旧昌平橋。工費をまかなう通行料として文久銭1枚（1厘5毛）を徴収したことから「文久橋」とも呼ばれました。この橋は、その後、東京府へ譲渡され、現在の昌平橋は、昭和3（1928）年にその上流に架けられました。その2年後、旧昌平橋の場所に万世橋が造られています。

【住所】東京都千代田区外神田1丁目1-1（JR秋葉原駅より徒歩3分）

参考資料等

佐々木榮一『豊川ターレット物語』私家版
多田宏行『「新編」語り継ぐ舗装技術』鹿島出版会